教師が語る

これからの社会を見据え、求められる進路指導と教師が果たすべき役割を考える

昨今の教育環境の変化の背景には、社会のあり方が大きく変わってきていることがある。「答えが1つではない問題に直面する社会」では、どのような力が必要で、高校にはどのような進路指導が求められるのか。自校の生徒の志望を育て、よりよい進路指導を模索する3校の教師が語り合った。

道を提示する指導から考え方を提示する指導へ

柏木　ニューヨーク市立大学のキャシー・デビッドソン教授は、「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろう」と予測し、日本の教育現場でも大きな話題となりました。人工知能の発達やグローバル化の進行などによって、今の高校生が30代や40代になった時には、社会は大きな変貌を遂げていることが考えられます。そのような社会環境の変化を考えた時、高校では、これからどのような進路指導が求められると思われますか。

松井　従来の「道を提示する進路指導」から「考え方を提示する進路指導」への転換が必要だと思います。これまでの進路指導は、生徒に将来就きたい職業を決めさせて、「その職業に就くのなら、大学はこの学部のこの学科に進んだ方がいいよ」と、ゴールまでの最短距離を逆算する指導をしてきました。しかし、今後は社会環境の変化によって、なくなる職業がある一方で、新しく生まれる職業もあるはずです。そう考えると、今の段階で道を提示して、将来の生き方を限定することは、生徒の可能性を狭めてしまうことになりかねません。むしろ、「君が興味を持っていることを、社会の中で実現しようとするならば、こんな働き方が考えられるし、今後社会がこう変わっていけば、こんな働き方も考えられるかもしれないね」といったように、働き方や自分にとっての働くことの意味・価値を考えさせることが重要です。

　極端に言えば「将来のことを決める進路指導」から、「あえて決めない進路指導」への転換です。生徒には、自分は将来何をしたいのかを考えさせますが、具体的な職業にまでは必ずしも落とし込ませない。そのような進路指導では、生徒は将来の進路が決まらず不安に感じるかもしれません。そこで生徒には、「これからの社会は何が起きるか分からないからこそ、可能性がたくさんあってわくわくするよね。どのような社会になったとしても、充実した人生が送れるように、自分は社会に出たら何をしたいか、どんな貢献ができそうかを考えよう」といったメッセージを発信していくことが大切になると思います。

生徒たちの構えた態度を時間をかけて解きほぐす

浜屋　私は現在は教頭を務めていますが、昨年までは一教師として学級担任をしていました。私が担任として進路指導の際に注力していたのは、面談を通じて、生徒に将来の生き方や働き方をより深く考えさせること、覚悟を決めさせることでした。

例えば以前、経営学部に進みたいという生徒がいました。しかし、最初の面談では、「経営学部を出て、どんな仕事がしたいの？」と私が尋ねても、全く答えられませんでした。その後、3年生になってようやく、「将来は会社を経営してみたい」と言うようになりました。ただ、経営者として具体的に何がしたいのかまでは、定まっていない様子でした。

そこで私は、「もし自分が経営者になって、お金を自由に使えるとしたら、その時、君は何がしたい？」と誘導してみました。すると、彼から出てきた言葉は、「起業を通じて、地元に貢献できる人材を育てたい」というものでした。それからは、彼自身も自分のやりたいことが明確になったようです。今は大学に進学し、人材育成に関するいろいろなボランティア活動や講演会などにも参加して研究活動を行っているそうです。この生徒のように、「地元に貢献できる人材を育てる」といった、自分がやるべきこと、やりたいことに対しての覚悟が決まれば、今後社会がどのように変化したとしても、その生き方を貫けるはずです。

生徒は、「自分が本当にやりたいこと」を簡単には見つけられません。1・2年生のうちから何度も問い続け、大学入試の直前になってようやく、自分の進むべき方向が固まってくる生徒もいます。それでも私は、生徒には結論を出すのを急がせず、とことん考えさせるようにしていました。そういった進路指導は手間がかかりますが、これからはますます必要になってくると思っています。

松村　私も面談が果たす役割は非常に大きいと考えています。ただ難しいのが、自分の進路について教師と考えがずれることを恐れてか、駄目出しをされないようにすごく構えて面談に臨んでくる生徒が多いことです。それでも、志望している大学や学部・学科が、自分なりに深く考えた上で決めたものであればまだよいのですが、生徒自身の希望というよりも、保護者の意向をくんだものである場合が少なくありません。

ですから私は、生徒の、将来の進路は「こうすべきだ」「こうするし

北海道旭川東高校
松井恵一　まつい・けいいち
教職歴18年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。担当科目は政治・経済。

島根県・私立開星中学校・高校
浜屋　陽　はまや・あきら
教職歴28年。同校に赴任して29年目。教頭。

山口県立下関南高校
松村成通　まつむら・しげみち
教職歴27年。同校に赴任して11年目。進路指導部長。担当科目は地理。

㈱ベネッセコーポレーション『VIEW21』高校版 編集長
柏木　崇　かしわぎ・たかし

かない」と決めつけてしまっている状態を解きほぐすことから始めるようにしています。そして、生徒が授業での活動や部活動、委員会活動などの特別活動を通して、自分の適性や、本心からやりたいと思えることを探り出し、深掘りできるように、時に寄り添い、時に揺さぶりをかけながら、仕かけていきます。

それには時間がかかります。保護者や教師から指示されることに慣れていて、自分で考える習慣がついていない生徒も少なくありません。私は面談の時に、進路や学習のことについて、必ず生徒の方から2つ以上質問をさせるようにしています。しかし、自分自身に関することにもかかわらず、驚くほど質問が出てきません。それは、自分で考え、動くことができなくなっているからだと思います。そしてその要因は、私たち教師が彼らの考える機会を奪っているからではないか、といった自己反省もあります。

浜屋　確かに、私たち教師が口を出しすぎていることは考えられますね。例えば集会の場面では、私たちは時間を気にするあまり、すぐに「2年生は早くここに座りなさい」といった指示を出してしまいます。しかし、最近は時間がオーバーしそうになっても、あえて何も言わないようにしています。すると、生徒は自分で考えて行動するようになるんですよ。

そのように、あえて生徒自身に考えさせ、行動させる機会を教師が意図的に増やしていくことが必要なのかもしれません。

「社会の変化が激しい これからの時代は、ずっと 学び続けることが求められる」 松井

学びの意味を見いだし 学び続ける力を育む

松井　これからは進路に対する考え方が変わるだけでなく、学ぶ意味や理由も変わってくるのではないかと思います。今までは、進学や就職といった次のステージを確定させるために学ぶという側面がありました。そのため、進路に直結しないこと、例えば、入試で課されない教科・科目は、「その科目を勉強しても意味がない」と言って、学ぼうとしない生徒が少なからずいました。また、進学先や就職先が決まるまでは一生懸命勉強しますが、進路が決まった後は学びから離れてしまうケースも多く見られました。ある意味、それが許された社会だったわけです。

しかし、社会の変化が激しくなっていくこれからの時代は、次のステージに進んだからといって安泰というわけではありませんから、ずっと学び続けることが求められます。「なぜ、学ぶのか」という問いに、本質的な答えを返せる生徒を育てる必要があると思います。

「他者に貢献したいという意識が 大学や社会に進んでも 学び続ける力を生む」 浜屋

柏木　学びの意味を見いだすためには、何が大切になるのでしょうか。

松井　本校では、「旭東（きょくとう）アカデメイア」という名称の探究学習を実施しています。その取り組みに携わる先生方と話しているのは、「生徒には大いなる不完全燃焼をさせたい」ということです。

昨年の生徒の中に、探究するテーマを自分で決めて、一生懸命研究活動をしていた生徒がいました。ところが、いざまとめの段階に入った時に、その研究は既にほかにもまとめた人がいることが明らかになったのです。それにより、その研究は生徒にとっては不完全燃焼なものになってしまったわけです。そこでその生徒は、その分野でまだ明らかになっていない部分を自分の手でもっと探究したいと考えるようになりました。今はその研究を大学で続けるために、大学受験の準備をしています。

不完全燃焼が、次のステージで学び続けるための原動力になっているのです。

だから私は、探究学習では生徒は結果を出せなくてもよいと考えています。結果を出すことが探究学習の成果ではなく、次のステージでの学びにつなげていくことが成果であると捉えています。

松村　生徒たちに今取り組んでいることだけで満足させずに、その先の学びを見せるというのは、普段の授業の中でも意識するべきことだと思います。私の担当科目は地理ですが、教える内容は教科書に沿いながらも、授業の中で取り上げる話題や教材を工夫することによって、「地理という科目は、奥が深そうだな。もっと学びたいな」と生徒たちに感じさせることは、十分可能だと考えています。学校の活動の中心は何と言っても授業ですから、授業を通じて次のステージでの学びを見せることが大事です。そのため教師には、教材研究や授業研究が欠かせません。

「授業を通じて『なぜ、学ぶのか』『どう生きるのか』を、生徒に深く考えさせる」　松村

他者貢献や社会貢献の視点を生徒に与える

浜屋　私は、生徒が学びの意味を見いだすためには、他者貢献や社会貢献の視点を生徒に与えることも、大切なのではないかと思っています。

例えば、私たちが今こうして、これからの高校の進路指導のあり方を議論したり、考えたりするのも、やはり根底にあるのは、「生徒がこれからの時代をよりよく生きられるようにしたい」「社会の役に立ちたい」といった他者貢献や社会貢献の意識です。その意識が、私たち自身が学び続ける上でのエンジンになっています。ですから生徒に対しても、他者貢献や社会貢献の意識を育みたい。そのためにはまず、他者や社会に対する関心そのものを高める必要があります。

松村　その通りですね。今は家庭で新聞を読んでいない生徒が増えています。そのためか、生徒は社会の動きをよく知りません。そこで本校では、様々な教育活動でＮＩＥ（＊）を取り入れており、記事の中で気になった部分に線を引いてノートに貼らせ、一言コメントを書かせるといった活動を続けています。また、地理の授業では、生徒に新書を読ませ、その内容を文章で要約させたり、口頭で説明させたりするといったことも行っています。新聞を読むことで、社会で起きている問題を幅広く知り、新書を読むことで１つの問題を深掘りして考えさせるということを意識しています。

学びの意味を見いだす上で大切なのは、倫理の授業や道徳に関する活動などを通じて、「なぜ、学ぶのか」「どう生きるのか」を生徒に深く考えさせる機会を設けることだと思います。先人たちが生き方や社会のあり方をどう考え、学問に取り組んでいったかを学ぶことが、自らの生き方や学び方を考える上で役に立つはずです。

浜屋　本校でも、道徳は非常に重視しており、今年度からは「総合的な学習の時間」の中に、道徳をテーマとした学習を取り入れました。

本校は１学年６クラスですので、６人の副担任の教師が持ち回りで１時間ずつ違うクラスに出向きます。そして、学級担任とＴＴで授業を進めています。生徒は計６人の教師から毎回違うテーマを提示され、どう生きるべきか、一緒に考え、議論していくのです。

松井　私は、外部の力を活用することも大切だと思います。教師だけで生徒を指導し、評価していると、生徒も教師の評価に自分を合わせようとするため、こぢんまりとまとまってしまいます。地域の大人など、教師とは異なる視点を持つ人だからこ

＊NIE(Newspaper in Education =「エヌ・アイ・イー」)は、学校などで新聞を教材として活用する学習のこと。

そ、生徒の能力や資質を引き出し、視野を広げることに貢献してくれる場合もあると思います。教師だけで、生徒を育てようとしないことも大事ですね。

生徒の学びや成長の状況をどう把握し、評価するか

浜屋　従来とは進路指導のあり方や育むべき力が変わってきている中で、生徒の学びや成長についての評価方法も、従来とは異なる方法を開発していく必要があると思います。しかし、「生徒の進路観がどこまで醸成されたか」「学び続ける力がどの程度身についたか」といったことを客観的に把握、評価するのは難しい。それが課題だと思います。

松井　その課題の解決に必要な第一歩は、学校ごとに「育てたい生徒像」を明確にすることでしょう。そして、その「育てたい生徒像」に、個々の生徒がどこまで近づいているのかを評価するための指標をつくることが、適切な評価を行っていく上で必要なことだと思います。

浜屋　確かにそうですね。本校では、「つくる力（創造力）」「つながる力（共生力）」「もちこたえる力（忍耐力）」の3つの頭文字を取った「つつも」を、学校として育むべき学力として捉え、教育活動を展開しています。本校もその3つの観点で、生徒の成長を把握、評価する方法をつくっていかなくてはいけないと思います。

松村　そういった意味では、かつて「総合的な学習の時間」の導入にあたって、SI（スクール・アイデンティティー）の確立の重要性が盛んに言われましたが、各校がもう一度SIを見直すべき時期が来ているのかもしれません。

　また、近年の大学は、アドミッション・ポリシーをかなり具体的に打ち出すようになりました。そのため、高校側も「その大学がどんな学生を求めていて、どういった教育を行おうとしているのか」を把握した上で、進路指導ができるようになりました。高校も大学と同じように、アドミッション・ポリシーや、さらには卒業までに身につけさせるべき能力を定めたディプロマ・ポリシーをより明確にできれば、アドミッション・ポリシーやディプロマ・ポリシーに照らし合わせて、生徒が入学から現在まで、どこまで成長しているかを評価できるようになります。それはこれから検討していくべき点ですね。

大人の側こそ変わる必要がある

柏木　先ほど松村先生は、「希望進路は保護者の意向をくんで決めるものと思い込んでいる生徒が少なくない。その固定観念をどうほぐしていくかが重要だ」といった話をされていました。保護者世代の進路観や職業観に生徒が縛られているといった面はあるのでしょうか。

松井　それは私も感じます。私が教師を務めている北海道は、保護者の資格志向や公務員志向が強いです。

　私が保護者の方に「これからの社会はますます激しく変化していくと思われます」と話すと、「不確実性が高い時代だからこそ、子どもには安定した職業に就かせたい」と多くの保護者は言います。するとどうしても生徒は、保護者のそういった考え方の影響を受けてしまいます。

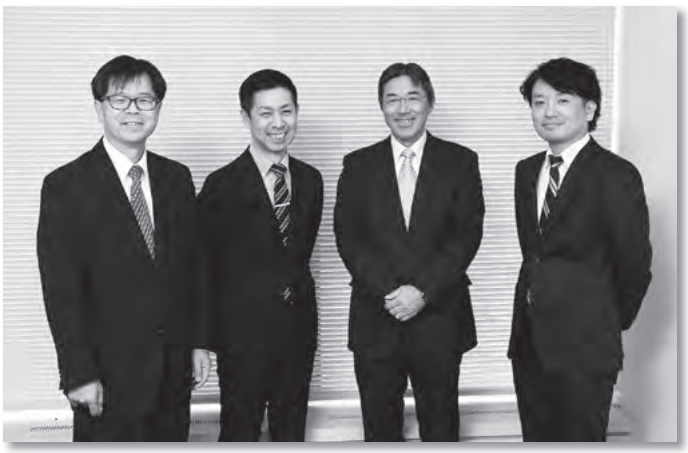
松村　そのような生徒ほど、学力的にも伸び悩む傾向があります。学びが、次の段階に進むためだけのものになっているため、高校での成績も頭打ちになりやすく、その生徒の可能性を狭めている気がします。

　私は生徒に、「もし、ここに将来のことが何でも分かる魔法の水晶玉があるとしたら、君は10年後の自分の姿が知りたい？」と尋ねることがあるのですが、生徒たちは口をそろえて、「見たくないです」と言います。未来のことは分からないからこそ楽しみなのであり、それぞれが自分の可能性を信じているのです。ところが職業に関しては、保護者の影響を受けて早く決めたがります。

浜屋　生徒たちが探究的な活動に取り組んでいる様子を保護者に見せる機会を増やすことは、保護者の意識を変えるための有効策になるかもしれません。本校はSSHの指定校ですが、発表会での生徒たちの姿を見て、「家では全然話してくれないのですが、うちの子は学校でこんなことに興味を持って研究をしていたのですね」と、感激した面持ちで話される保護者の方がいらっしゃいます。そういったことがきっかけで、子どもの将来の進路や職業に対する

保護者の価値観が変わることもあります。

保護者を学校に巻き込んでいくのが難しいのは事実です。本校では親学講座を年に3回程度開催していますが、なかなか出席率が上がりません。来ていただけるのは、教育事情や社会動向に元々興味をお持ちの方で、本当に来ていただきたい方になかなか来ていただけない。ただ、子どもの成長に興味がない保護者はいないはずです。学校としては、社会や教育の状況、子どもの学びの姿を保護者に知っていただく機会を増やす工夫をこれからもしていかなくてはいけないと思います。



松井　そう考えると、変わらなくてはいけないのは、子どもではなく、むしろ大人の方かもしれません。子どもは時代の申し子ですから、次の時代にも対応する力を潜在的に持っているものだと思います。ところが、大人が変化を恐れているために、自分たちの時代の価値観や考え方を子どもたちに押しつけ、彼らの可能性を阻害している恐れがあります。それは保護者だけでなく、私たち教師にもあてはまります。教師にも、変わることに対する抵抗感が少なからずありますからね。

柏木　では、ここまで話してきた「これからの進路指導のあり方」を教師間で共有し、個々の教師が変化を恐れず、果敢に挑戦していける教師集団をつくっていくためには、どのようなことが必要になると思われますか。

松村　ここまでの私たちの議論に対して、読者の先生方の中には、「そんなことを言っても、多忙でそこまで手が回らない」といった感想を抱かれた方も多いと思います。しかし、生徒に「どう生きたいのか」「なぜ、学ぶのか」を深く考えさせる指導を行うためには、生徒とじっくりと向き合う時間を確保することが不可欠です。そのためには、今抱えている業務や行事をチェックし、効果が低いものは思い切って削ることが必要だと思います。本校でも、1つ新しい進路関係行事を導入したら、必ず1つ減らすようにしています。

浜屋　以前、本校のある委員会で、学校が抱えている問題について教師間で話し合ったところ、出てきたのは教師間のコミュニケーションに関することばかりでした。それはどこの高校も同様に抱えている課題ではないでしょうか。結局のところ、教師間のコミュニケーション不足が、進路指導や生徒指導、学力観の共有の妨げになっているように思います。例えば職員室で席が離れていても、相手の席まで足を運び、顔を突き合わせて関係をつくっていく努力が必要です。

松井　私は1人の教師が何でもできるようになる必要はないと思います。例えば、苦手な分野はほかの先生や外部の人の協力を仰ぎ、自分は得意分野を磨いていく。そうした協働的な学校組織をつくっていけば、一人ひとりの教師に時間的な余裕ができ、生徒への進路指導においても、変化を恐れずに挑戦する気持ちになるのではないでしょうか。

また、私たちは教師という仕事を通じて、大人が働く姿を生徒に見せている面もあります。教師同士で協力しながら1つの仕事をやり遂げる姿を目にすることで、「働くってこういうことなんだな」と、生徒たちは学んでいきます。そういった意味では、教師が生き生きと働いている姿を生徒に見せることは、これまでも、そしてこれからも、大切な進路指導であると思います。